

1.

小泉明郎

二〇一九年六月八日

横浜市旧深谷通信所

逃れようのないもののへの
違和感や怒り



国

アフガニスタン

イラク

戸塚駅は、大規模な再開発でがらりと姿を変えていた。

待ち合わせ場所の西口交番前から空を見上げると、雲間から陽光が射し込んでくる。

ほっと胸を撫で下ろすと、車の運転席から手を振る小泉さんが見えた。

今回取材場所として小泉さんから提案された「ちよつと変わっていて面白い」ところは屋外だった。アクセスが悪いので戸塚駅まで迎えに行きますとのご厚意に甘えて、助手席に座った。

戸塚は子どもの頃の記憶と深く結びついている街だ。父方の祖父母の家で元旦を迎え、翌朝箱根駅伝を沿道から応援するのが楽しみだった。テレビで見るより何倍も速く目の前を駆け抜ける選手にエールを送っていた情景が車窓から流れる景色と重なり、幼い頃の記憶がみるみる蘇る。

興奮してその話をしていたようだ。せつかくだから行ってみましょうと小泉さんはハンドルを大きく右に切り、思い出の道へと車を走らせた。

他人の、ほんの小さな記憶を拾うただけに迷わず遠回りを選ぶ。

前方に見えてきたガードレールの向こう側に、祖父母と並ぶ小さなわたしが立っているのを一緒に確認すると、小泉さんは頷きながらゆつくりと車をUターンさせた。

この取材の数カ月前に、小泉さんの映像インスタレーション《私たちは未来の死者を弔う》を北千住BLOXで鑑賞した。その後のトークイベントで小泉さんは、以前から南京やアウシュヴィッツで死と対峙する人々に関心があり、国家レベルでなく個人にとつての儀礼をよく見つめたいと考えていたこと、今回若者たちと一緒に作品を作ること、戦時中と今を結びつけないかと思つたことを語った。撮影前、小泉さんと若者たちは自衛官に話を訊いていた。自衛官に採用されると、最初の三カ月で《個》が削ぎ落とされるという。訓練で連帯感や高揚感が育まれていく過程を辿ってから、撮影に臨んでいた。

撮影場所は都内の米軍基地跡地で、西陽の中で行う構想だったという。ところが、当日は極寒の雨。《未来の英雄／死者たち》を弔う儀式の撮影は、雨風吹き荒ぶ中で行われた。参加した二〇名の若者たちは「あなたは何かを守るために命を投げ出せますか？」という究極的な問いに、演出や演技どころではなく身体の内芯まで凍え切った状態で答えていたことが笑い話として明かされた。

今日も米軍基地跡地へ向かっている。

昨日、関東の梅雨入りが発表されたばかりで雲行きは怪しかった。突然の豪雨も覚悟していたが、傘の出番はなさそうだ。住宅街から人気の少ない緑の一本道を抜けると、広々としたグラウンドが見えてきた。

国家の矛盾とアイロニー

空高く響き渡る打球の音と鳥のさえずりに耳を澄ませながら、雨上がりの芝を踏みしめて歩く。ここは、深谷通信所跡地。元は旧日本海軍の通信基地だった。敗戦後七〇年間米軍に接収されていたが、地域の住民は菜園や野球場として利用することができた。五年前に返還され、今は国有地となっている。直径一キロの円い形をした広大な土地だ。

「中心に高さ一六〇メートルの巨大なアンテナが立っていて、ここからハワイまで電波を飛ばしていたんです」と小泉さんが指差す方角に、今は見えないランドマークがあった風景を想像する。太平洋の島々とながりを感じられる場所で、小泉さんはわたくしが初めて作ったマーシャル諸島の下キメントリー映画『タリナイ』の感想から語り始めた。

004

1. 小泉明郎

映画に出演している佐藤勉さんは、二歳でお父さんと別れたんですよね。自分も三〇代の後半に、いま六歳になる子どもができました。もし息子が二歳の時に自分がいなくなったらと想像すると、すごくグツとくるものがありました。

なんといつても象徴的だったのは慰霊祭のシーン。矛盾を美しく描いています。映画『サウルの息子』（ネメシュ・ラースロー監督、二〇一五年、ハンガリー）を思い出しました。

極限状態のアウシュヴィッツで子どもが死んで、どうにかして人間として弔おうとするサウルと同じように、佐藤さんも遠い南の島で、人間以下の状況で死んでいったお父さんを人間として弔いたいという気持ちだったのでしょうか。

そういった想いを最初から説明的に描くのではなく、個人に焦点をあてて少しずつ描いていく。ところがそのクライマックスにあたる慰霊祭で、国家が出てきてしまう。そこに日本的な儀式を知らない地元の人も参加していることでアイロニーが入ってくる。不思議な気持ちになりました。

弔うことのなかに国家の暴力や規定があつて、そこでは歪な儀式が行われている。そこに佐藤さんの個人的な声が重なってきて、観る者を感情的に揺さぶる。ただの反戦メッセージではなく、白か黒だけではない両面性を描くことで、無意識のレイヤーを扱う作品になっていくことが重要だと思いました。

005

逃れようのないものへの違和感や怒り

無意識に潜む権力

ウミガメの場面も印象的でした。こんな樂園みたいな、生命に溢れている場所で食べるものがなくなるとはどういうことなのか、想像ができない。でも、ウミガメを殺して食べるという話が入ることでアイロニーが描かれていて、とてもグロテスクです。人肉食が示

唆されるこわいシーンが、さりげなく、爽やかに描かれている。

アイロニーやダークな部分や国家の矛盾も描きながら、人間的な親しみに軸足があるから作品がとても温かい。その上で、朝鮮や台湾の人々を労働力として連行してきた証言など、具体的な暴力の記憶が垣間見えます。そのような複雑さの表現がすごく大切なんだと思います。自分も同じ関心をもって制作していますが、もし同じテーマを扱ったら、もつと対立を強調してしまうかもしれません。

マーシャル諸島でウミガメはご馳走だ。蒸し焼きやスープとして祭事で振舞われる。島の食文化を伝える場面でもありながら、そこで繰り広げられた話は戦時中の加害と被害をめぐるものにもなった。以前、米国コロラド州デンバーで上映した際「ウミガメのシーンはいいなと思った」と感想をもらったことがあった。真意はわからなかったが、理由を聞いてみたかったことを思い出す。

ここ深谷通信所が日本海軍の通信基地だった頃、米軍の飛び石作戦によって補給路を絶たれたマーシャル諸島のウォッチェ環礁では、敗戦までの約一年半、飢えとの闘いを強いられた。生還兵の証言では、復員船から振り返った島には椰子の木が一本しか残っていなかったという。その後一九四六年から六七回に及ぶ水爆実験が行われ、ヤシの実や魚介などの食料を得ながら自然とともに生活していた暮らしが一変した人々もいる。今は輸入食品が主食と

なり、戦時中は自然を食い尽くすほどの飢えがあったと想像することは難しい。

小泉さんは、過去にお父さんが食べられてしまう夢を見たことがあるという。

小さいころに見た夢です。食糧難で、誰かが鶏のエサにならないといけない。そこで、父が何者かに連れて行かれてしまっています。

「明郎、仕方がないんだ。お父さんは選ばれちゃったんだから」と父はその状況を受け入れています。悲しくて仕方がない。目が覚めても悲しくて泣く夢を見たのは初めてだったので、よく覚えています。当時、テレビで見ていた仮面ライダーは何者かに家族が連れて行かれる設定が多いので、その影響もあったかもしれません。

その夢を見て感じたのは、親の存在の大きさです。夢を見たことで、いつも守ってくれていた人が突然いなくなってしまう感覚がわかったんですね。同時に、自分を守っていた父親も全能ではないということに気づきました。無意識のレベルでは父殺しの夢だったのかもしれません。

その夢から着想を得た作品をいつか作りたいと思つて作られたのが《帝国は今日も歌う》(二〇一七年)というビデオ・インスタレーション作品です。以前天皇についての作品を制作中、この夢と天皇を重ね合わせたら作品になると思いつきました。自分を守っているもの、無意識に受け入れているものは、強力だけど全能ではない。無意識に潜む権力に